

て今日の学力論争を俯瞰すると、一点重要な点を見落としていることに気づく。最後にその一点を問題提起する形でこの書評を終えたい。

その一点とは、論者の多くが苅谷氏の学力－階層関係についての問題化にのみ着目し、氏のもう一つの指摘を見落としている点である。確かに学力と階層の関連についての議論は以前からあった。しかし苅谷氏の功績は、むしろ差別感を子供に与えるという理由により、能力・学力・階層の格差に触れること自体が避けられてきたという歴史的経緯を、今日の学力論争が生じる前に『大衆教育社会のゆくえ』にて十年前に指摘していた点にある。実は苅谷氏のこの指摘があるからこそ、学力－階層の関連を社会に向けて発信し問題化する意味があったのだ。ただし学力－階層問題が強調されるあまり、その問題に蓋をしてきた装置、すなわち（被差別）感情への過度な配慮については、今でも学校現場をはじめ我々の社会

全般は十分な視線を向けていないように思う。我々の社会がこの蓋をいまだに持っているとするれば、この蓋の扱い方の再考こそが必要ではないか。蓋を取らずに学力－階層の関連を問題化しても、蓋が邪魔して歪んだ形でしか学力問題は扱われない。事実学力には視線が向けられるようになったが、階層への正面からの取り組みは研究者以外にも広がったのだろうか。評者が最近関わった学力実態調査では、学校は依然家庭への心情的配慮に敏感であり、家庭背景に関する調査が難しい状況であった。2007年から文科省により全国学力調査が実施されることになったが、これと並行して家庭背景に踏み込んだ調査が実施されるだろうか。この全国学力調査は、文科省が学力論の日本の本質に切り込めたかどうかの試金石になろう。

◆B 6 判 223頁 本体1,800円
ミネルヴァ書房 2005年1月刊

■ 書 評 ■

山田昌弘 [著]

『希望格差社会——「負け組」の絶望感が日本を引き裂く——』

労働政策研究・研修機構 小杉 礼子

現在我が国で進行しているのは、経済的格差の拡大ばかりでなく、将来に希望が持てる人と将来に絶望している人の分裂であり、これこそが問題だというのが本書のタイトルの意味するところである。以下、本書の主な議論を各章の記述に沿って紹介する。

1990年以降、家族関係、学卒就職、青少年の非社会的行動などで大きな変化が起こっており、また、大人も子どもも将来生活への不安が大きくなっている。不安定化を背景に、努力をすれば「豊かな生活」が手に入ることに裏打ちされた希望が失われ、不安が広がっているのでは

る。本書の目的は、この生活の不安定化のプロセスを「リスク化」「二極化」の2つのキーワードで捉え、このそれぞれの実態を明らかにすることである。そして、この不安定化は避け得ない事態であり、これを見据えての対応が必要だという（第1章）。

本書では「生活リスク（＝人並みの生活ができなくなる危険）」をリスクの中心とする。高度成長期は予測可能性が高くリスクは小さかったが、1990年ごろからリスクをとることを強要される「リスクの普遍化」が起こり、同時に「リスクの個人化」も進行して家族や企業などの中間集団が個人を守れなくなった。リスク化は自己責任の強調につながるが、一方で努力しなくとも危険な状態に陥らずに済む可能性もあるため、努力を無駄と考える「運頼み」の人間（＝フリーター、パラサイト・シングル）を生み出しているという（第2章）。

「二極化」は、量的格差（収入等数値化できる格差）の拡大ばかりでなく、質的格差（ステータスの差や心理的な差）をふくむ。産業構造の転換を背景に職業での質的格差が出現し拡大していること、家族（夫婦、親子）の「利用可能性」の差が拡大していることが二極化を進行させている。二極化は、仕事能力がないと自覚する人のやる気を失わせ、家族の「利用可能性」の低い人の不満を高め、将来に希望をもてない人を増やしている（第3章）。

さて、高度成長期に形成された「安心社会」では、職業領域での「男性雇用の安定と収入増加」、家族領域での「サラ

リーマン－専業主婦家族の安定と生活水準の向上」、教育領域での「学校教育の職業振り分け機能（パイプライン・システム）の成功と学歴上昇」が人々に希望をもたらししていた（第4章）。

1990年代に入り、不安定化が進行する。職業分野ではニューエコノミーが労働力を二極化し、「夢見る使い捨て労働者」としてのフリーターを増加させ（第5章）、家族は未婚のリスク・離婚のリスクが高まり、「サラリーマン－専業主婦」家族が不安定化する（第6章）。教育分野では、パイプライン・システムに「漏れ」がおこって、漏れて落ちたものが「フリーター」になる。若者には、学歴に見合った仕事に就けなくなる不安が広がり、勉強して上昇異動する期待も失われる。一方、漏れる確率の高い層では、むしろ過大な期待をあきらめる機会がなくなっている（第7章）。

こうした不安定な社会で、「努力が報われない機会」が増大し、希望をもてる人ともてない人の格差が拡大している。希望なき社会で「労苦」を忘れ逃れようという人が増加していることが、嗜好（アディクション）としての薬物中毒等、絶望からの犯罪、あるいは、社会的ひきこもりなどの増加につながっている。そして、パラサイト・シングルやフリーターもそうした「労苦」からの逃走であり、社会の荷物、不安定要因となるという（第8章）。だから対策が必要であり、リスク化や二極化に耐えうる個人を公共政策で作り出すことが重要である。具体的には、能力開発の機会の提供と努力が報われることを実感できる仕組み、カウン

書 評

セリングの強化などの対策を総合的に行う必要がある（第9章）。

クリアに現代社会の状況を切り取った著作である。一貫したストーリーが強いインパクトを残し、この本が話題を呼んだことに納得がいく。

さて、「あとがき」には学生たちに現状を認識してもらわなければならないという思いから始めた講義がもとになっていると記されているが、おそらく講義には、強い個人となり「夢見る使い捨て労働力」にはなるなというメッセージがこめられていたのではないかと想像される。「運頼み」の「漏れ落ちた」若者たちという非正社員の若者へのラベリングは、そうした背景を想像しなければ、理解しがたいところがある。

また、本書には統計データが多数用いられているし、実証的な調査研究を手がけられてきた著者であるだけに、データの裏づけが欲しい議論もあった。例えば、

職業高校を特に漏れの多いパイプラインだとしたり、専門学校と各種学校を一括して漏れを前提とした新たなパイプラインだと指摘するあたりは、学校卒業時点での進路データでの確認が欲しいところである。（データの扱い等への疑問は、すでに、本田（「日本労働研究雑誌」No.540, 2005. 7）の評が的確な指摘をしている。）

第9章で提案されている公共的支援については大変賛同するが、効果的な支援とするためには若者の側の発想や理屈に沿った展開が必要である。政策発動を促すために、あえて強いインパクトのある議論とする必要があったのかもしれないが、私には、中核的労働力となっていない若者たちを夢みるだけのリスクからの逃走者と決め付けるのではない議論が必要だと思われる。

◆B 6判 254頁 1,900円
筑摩書房 2004年11月刊